

💡 見守る力—応援が子どもを育てるとき

勝って泣く子がいる。負けて泣く子がいる。
その涙の意味を、私たちはどれだけ受けとめているだろうか。
「頑張れ」「負けるな」—応援の言葉には、愛情が込められている。
けれど時に、それが子どもにとってプレッシャーになることもある。
勝っても負けても、子どもたちはそれぞれの思いを抱えている。
大切なのは、その感情を大人がどう受けとめ、どう支えるかである。

応援は、声の大きさではなく、**心の距離**で決まる。
勝利を喜びながらも、相手チームに拍手を送る。
敗戦の悔しさに寄り添いながらも、「よくやった」と誇りを示す。
その一つひとつが、子どもたちにスポーツの意味を教えていく。

人が自ら成長していくためには「自律」「有能感」「関係性」が満たされることが大切だと言われる。
大人の応援がこの3つを支えるものであれば、子どもは伸びていく。
けれど、もしそれが「期待」や「比較」ばかりを伝えるものなら、努力する喜びは次第に薄れてしまう。
だからこそ、私たち大人は**「見守る力」**を磨きたい。

急かさず、過度に助けず、けれど目を離さない。
それは決して何もしないことではない。
信じて待つという、能動的な支援のかたちである。
子どもが挑戦し、失敗し、また立ち上がる。



その一連のプロセスを、**尊敬と誇りのまなざし**で見つめること—
それが、「アントラージュ」としてのインテグリティだ。
応援とは、声をかけることよりも、心で支えることなのかもしれない。

** 「余録」 **

「あんぱんロス」から立ち直りつつ……



NHK 連続テレビ小説『あんぱん』で描かれていたのは、「逆転しない正義」というテーマでした。どれほど不利な状況にあっても、損得よりも「まっすぐでありたい」という思いを貫き、正義を勝つための手段ではなく、人としてどうあるかの指針として抱き続けていました。

この姿勢は、スポーツの現場にも通じるものがあります。ときに、正しい判断が「勝利」を遠ざけることもあります。相手を尊重するあまり自分のチームの勢いを失ったりすることもあります。それでも、その姿勢こそが子どもたちの記憶に残り、彼らの中に「スポーツmanship」という見えない土台を築いていきます。

たとえ結果で報われなくても、「逆転しない正義」とは自分の信じる道を手放さない勇気のことです。指導者がその姿勢をもって子どもたちと向き合うとき、勝敗の意味は静かに変化し、勝っても負けても、そこには誇れる「物語」が残ります。「見守る」という行為は、単なる受け身ではなく、他者の成長を信じ、自分の価値観を保ちながら支える倫理的な行動です。

インテグリティは「誠実さ」と訳されますが、教育倫理の領域では「価値の一貫性」として定義されており、状況に流されず、自分が大切にしている価値にもとづいて行動する力を意味します。スポーツにおける「見守り」も、この〈価値一貫性〉の実践であり、勝敗や他者の評価に左右されず、「子どもの成長を支える」という軸を持ち続けることが求められます。

それは時に、結果に一喜一憂する周囲の空気と逆行する勇気を必要としますが、その一貫性こそが子どもの信頼を生み、教育の根を深めていきます。『あんぱん』で語られた「逆転しない正義」は、まさにこの姿勢を象徴しており、報われなくても、損をしても、自分の正しさを手放さない生き方を示しています。それは、**勝ち負けの論理**ではなく、**成長の倫理**で動く生き方であり、「見守る力」とは、子どもの可能性を信じながら、自分の中の**正しい支援のかたち**を貫くことなのです。

この姿勢こそが、アントラージュに求められるインテグリティの本質であり、スポーツを「人を育てる文化」として継承していくための、静かな指針となります。

ところで、「八木さん（妻夫木聰）」と「蘭子ちゃん（河合優実）」はその後どうなったのでしょうか？
はっきり描かないのも余韻があつていいとは想いますが……